

炭酸ガス施用ハウスにおけるニラの葉先枯れ対策

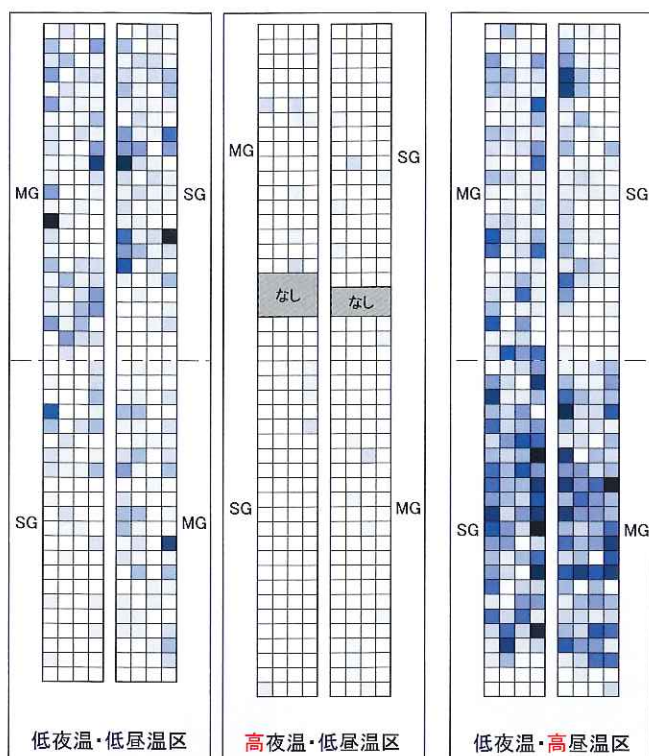


図1 葉先枯れ分布図(調査日:平成29年1月3～6日)

注) 1マスが1株、1ハウスあたり4うねのうち中央2うねのみを比較した図。1株当たり、萎れ、白、黄および赤(図2参照)の葉先枯れ発生葉数を調査。0枚:0、1～9枚:1～9、10枚以上:10として、0を白、1～10を薄青色～濃青色の濃淡で表した。図中のSGは‘スーパーグリーンベルト’、MGは‘ミラクルグリーンベルト’。

平成27年度までの試験より、施設栽培ニラでは、炭酸ガス施用、電照および多かん水を組み合わせると、慣行栽培に比べて増収が期待できる一方、厳寒期にアントシアニン色素の発現をともし葉先枯れ症状が発生しやすいことが分かりました。そこで、平成28年度からは、葉先枯れ症状の発生原因の解明とその対策に関する試験に取り組んでいます。

ここでは、平成28年度に実施したハウス内の温度管理の違いが葉先枯れの発生に及ぼす影響について紹介します。

‘スーパーグリーンベルト’および‘ミラクルグリーンベルト’を8月9日に定植、

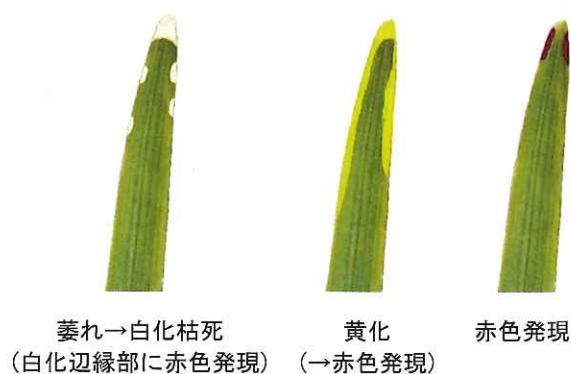


図2 葉先枯れ模式図(萎れ、白、黄および赤)



写真 栽培状況(平成29年2月13日)

炭酸ガスは400ppm以上を維持するように株元施用しました。ハウス3棟を用い、それぞれ低夜温・低昼温区(Min5℃/Max24℃)、高夜温・低昼温区(Min10℃/Max24℃)、低夜温・高昼温区(Min5℃/Max26℃、対照)として試験を行いました。その結果、高夜温・低昼温区では厳寒期の葉先枯れが著しく少ない傾向が認められました(図1, 2)。

次年度は、夜温を変温管理とした場合の抑制効果など、ハウス内温度と葉先枯れの関係についてさらに詳しく調査する予定です。

(営農システム担当 和田絵理子 088-863-4918)